

## 1998年度現地研究会に参加して

中 辻 浩 喜

北海道大学農学部附属農場、札幌市北区北11条西10丁目 〒060-0811

### はじめに

1998年度の現地研究会は「上川地区にみる酪農の2つの戦略 一 通年舎飼方式と放牧主体方式」をテーマとして、10月5日（月）～6日（火）に旭川市およびその近郊で行われた。最近の本研究会の現地検究会は糞尿処理関係の視察が多く、家畜生産全般、特に酪農生産をテーマとしたのは、1992年度の道央地区（放し飼い牛舎と乳牛管理）、94年度の十勝地区（低コスト酪農の実践例）での検究会以来であった。

10月5日夕方、宿泊先である旭川市高砂台の老舗旅館「扇松園」に集合し、総会ならびに懇親会を行なった。宿泊者は約50名であった。恒例の懇親会での自己紹介は「北海道開発公社方式」をとったことによって、流れるような展開で終了した。このため懇親の時間を十分とることができ、それぞれ翌日の見学会への鋭気（アルコール）を十分に養（採）った。

翌日（6日）の見学先は次の通りであった。

午前：上川郡上川町豊原 豊原生産組合  
（法人化による企業経営）

午後：上川郡東神楽町 多田牧場  
（傾斜地草地の利用と共同経営）

旭川市神居 斉藤牧場

（山地放牧地の蹄耕法利用）

### 1. 豊原生産組合

6日朝9：00「扇松園」を出発、最初の見学先、豊原生産組合のある上川町へと向かった。当日から加わった者も含めてバス2台、約80名の参加であった。旭川市内を通過、国道39号線を北東へ約

1時間、バスは上川町市街へとやってきた。その後左に折れ、バスは山道へ。どんどん奥深い山へとはいつていく。それから15分はたっただろうか、目的地の豊原生産組合に到着した。まず、組合長理事である関行男氏から本生産組合の概要説明があった。関氏は以前は、大手スーパーのダイエーに勤めていたそうである。



写真1 概要説明する関行男氏（豊原生産組合）

本組合は昭和38年に農業構造改善事業と道営開拓パイロット事業の指定を受け、離農跡地の払い下げと開発により、町内40戸の有畜農家の増反地方式によって発足した。しかしその後、酪農から稲作に経営の比重を移し、組合を離脱する構成員が相次ぎ幾多の危機もあったが、昭和49年、土地名義の変更を契機に農業生産法人として再出発した。さらに平成4年からの公社営畜産基地建設事業により、平成5年には施設を現在位置に移転し、以前の夏放牧、冬繋ぎ飼いかからフリーストールシステムでのTMR給与への転換、以後大規模経営に取り組んでいる状況であった。

構成員は7名、運営機構としては、組合長のもと総務部、畜産部（5名）、農産部（2名：冬は畜産部）

および畑作部が組織されている。畜産部では搾乳、飼料給与、繁殖および施設管理など、おもに乳牛や畜舎の管理を担当していた。なお、育成については別組織（後述のグリーンサポート）の共同育成牧場で行っている。農産部では草地管理および収穫など、おもに粗飼料生産を担当しているが、実際の作業は別組織のグリーンサポート内の機械利用組合を中心に行っている。総面積（林地含む）550ha、うち草地面積280ha、総頭数550頭、うち搾乳牛350頭、TMRによる6群管理（泌乳前期、中期、後期、初産、乾乳、治療・初乳期間）であった。また、年間出荷量3,027t、経産牛1頭当り平均乳量9,200kg（平成9年実績）とかなり好成績である。

本生産組合の特徴はその勤務体制にあり、個人ではない農事組合法人としてのメリットを大いに活用している。搾乳は1日3回を行っている。搾乳作業は1回当り3人（2人搾乳、1人ふん出し）で担当しており、週1回の休み（冬季は週2回）が取れるようにローテーションが組まれている。また、勤続5年以上の組合員（年間2名）はリフレッシュ休暇として3週間の休暇を取ることができるそうである。

まずはパーラーに入る。14頭ダブルのバラレルであった。1回の搾乳に4時間×3回=12時間であり（私の記憶に間違いがなければ）、1日の半分は搾乳をしている勘定になる。次に牛舎内へ移動。給与されているTMRをみると何だか粉っぽい。聞く



写真2 ミルキングパーラー（豊原生産組合）

ところによると濃厚飼料はマッシュを使っているとのこと。その理由は定かではない（価格?）。また、濃厚飼料を最大では乳量の1/2程度給与しているそうだが、大丈夫なのだろうかとちょっと気



写真3 フリーストールと給与されているTMR（豊原生産組合）



写真4 糞尿処理（豊原生産組合）

になった。糞尿処理は固液分離機を用いていた。屋外には乾燥した固体部分が堆積されていた。来年度は堆肥盤に屋根をかけるそうである。また、液状部分については将来的には川に放流できるまでにしたいそうだ。

この豊原生産組合では、個人ではできない大規模な企業的酪農の典型を垣間見たような気がする。サラリーマンと同様な勤務体制、あるいはそれ以上恵まれた休暇体制をみると、ある意味では「ゆとり」のある経営というのであろうか。

## 2. 多田牧場

豊原生産組合見学終了後、バス内で昼食を取りながら、次の目的地である東神楽町の多田牧場へ向かった。朝来た旭川からの道のりを逆行。雨がぱらつき始め嫌な予感がした。そういえば、幹事の一人であるH大学のK助教授は大雨男であったことを思い出し、あきらめかけたが何とか持ち直した。途中、当麻町の「道の駅」でトイレタイム。上川から1時間半程度で東神楽町にはいった。市街地からやはり山のほうへ向かう。多田牧場は東神楽町の八千代地区にあり、途中「八千代酪農団地」の看板が見えた。団地内は道路は狭いながらも整備され、山の割には周辺環境整備も行き届いており、きれいな印象を受けた。



写真5 概要説明する多田匡宏氏 (多田牧場)

まず最初に、経営主である多田匡宏氏から本牧場の概要説明を受ける。多田牧場は、昭和11年、現在の経営主である多田匡宏氏の両親が当地に入植、6.7haを開墾し雑穀などの作付けを行ったことからその歴史が始まった。20年後の昭和32年、牛1頭を導入し畑作酪農の複合経営を開始。その後、昭和40年、農業構造改善事業に取り組み、50頭規模の牛舎を新築、乳牛20頭を購入するとともに農業組合法人を設立した。昭和51年に牛舎が全焼するという不運に見舞われるものの数々の努力により復旧。昭和63年には長男が酪農学園大学を卒業して農業後継者として構成員として参加し、現在は匡宏氏夫妻、長男、および匡宏氏弟夫妻の計5

名で実質的な経営を行っている。

総面積(山林含む)100ha、うち草地面積46ha、飼料畑14haであり、総頭数120頭、うち搾乳牛50頭、年間出荷量500t、平均乳量8,000kg前後との説明であった。飼養管理の特徴は、夏は傾斜草地を利用した放牧主体である。放牧開始直後(5月初め)および終了直前(10月)は昼間に放牧するが、その他は基本的に夜間放牧だそうである。

まず、牛舎内を見学させていただいた。豊原生産組合と同じ法人経営であるが、豊原のような派手さはなく、外見上は一個人酪農家の様相である。見学時は10月であったこともあって牛舎内に牛はいなかった。飼槽にはコーンサイレージが用意され上に麩がふりかけてあった。牧草のタンパク質にコーンのでんぷん質・・・、いい組み合わせだ。来年の自分の実験計画のことが頭をよぎる。次に



写真6 いいかたちに積みされた堆肥 (多田牧場)

糞尿処理関係はどうなっているのか、バークリーナーの終点を観察する。堆肥専門家、H大のM教授がおっしゃるには「これはいいかたちですね」。敷料が十分に混合されて水分調整がうまくいっているとグチャツとつぶれずにうまく積みさる(北海道弁)そうです。

草地へはバスで移動した。山道を上がっていくが道路は舗装である。しばらく行くと眼下に眺望が開けた。採草地である。草地もきれいだったが眺める景色も美しかった。バスに乗っていると傾斜があまり感じられなかったが実際においてみる



写真7 採草地と美しい景色 (多田牧場)



写真8 放牧地での乾草給与 (多田牧場)



写真9 傾斜地放牧地 (多田牧場)

と結構な斜度であった。牛舎に戻る途中、放牧地が見えた。この時期は草量が不足しているので放牧地内でロールペール乾草を給与していた。放牧地は採草地に比べ傾斜がかなり急であり、また、食べられずに株化して残った牧草が目についた。放牧をいかした酪農経営ということなので、今度はもう一度、春の草が豊富な時期に訪問してみた

いと思った。

多田牧場も豊原生産組合と同じ農事組合法人であるが、かなり印象が違った。長期の休暇は別にして、1日の中での時間的な「ゆとり」はあるとの多田さんの話であった。心の「ゆとり」が感じられた。

### 3. 斉藤牧場

最後の見学地は斉藤牧場であり、再び旭川市内へと向かった。とはいえ、多田牧場から斉藤牧場へは30分足らずの道のりであった。国道237号線を横断し、旭川競馬場を右手に見ながら、水田がづく平野をバスは走った。進むにつれ、左右に山が迫ってきた。バスは木に囲まれた山道をのぼり、中腹で止まった。乳牛の牧場とはおよそ想像できないところであったが、そこはすでに斉藤牧場の中であった。

斉藤牧場の歴史は、昭和22年、現在の経営主である斉藤晶氏が当地に入植したことから始まった。現在、草地面積130ha、うち放牧専用地(林地含む)が60haである。放牧地のほとんどは、傾斜地というより山と石であり、長い年月をかけて、木を切り、火を入れ、そこに種を播き、牛をいれる、いわゆる蹄耕法によって草地造成されたものである。いただいた資料には、乳牛総頭数110頭、うち経産牛90頭、年間出荷量280t(平成9年度計画)と記載されていた。現在の斉藤牧場は、山地、傾斜地、岩場という条件不利地の蹄耕法による草地造成、昼夜放牧、自然交配、簡易畜舎等、「牛と自然」を活用した山地酪農のモデル的存在として、その筋では全国的に有名である。また、中山間地域低投入型畜産振興事業の放牧利用型畜産の普及、定着といったモデルともなっている。さらに、御存知の方もあると思いますが、斉藤牧場は「牛のおっぱい」なるタイトルのマンガのモデルであると推定されます。このようなことから、私の中でも斉藤牧場の経営は気になる存在であり、ぜひ

実際に行ってみたい酪農家の一つであった。

われわれがバスを降りた場所は、広い蹄耕法造成放牧地のちょうど入り口のようにであった。所々避陰林として木を残した、かなり急な斜面の草地



写真10 蹄耕法造成放牧地 (斉藤牧場)



写真11 概要説明する斉藤晶氏 (中央) と参加者達 (斉藤牧場)

を下に見ながら、斉藤氏の説明を聞く。年齢の割りには (失礼!) かなりの迫力である。放牧地は牛舎から最も遠いところでは3kmくらい離れており、全体を1牧区として利用しているとのことであった。斉藤氏が言うには、何もしなくても草のあるところに牛が勝手に移動し、搾乳時間になると牛舎近辺にちゃんと戻ってくるそうである。次にもう少し上に登ったところで、火入れ後、牧草の種を播いた場所を見学する。昨年播種したとのことであるが、牧草がしっかり定着していた。火入れのコツについての質問があったが、そのやり取りを聞いていると、長年の試行錯誤の経験から



写真12 火入れ、播種1年後のようす (斉藤牧場)

得た斉藤氏独特のテクニックがあると感じた。

さらに上に登り、旭川市街を見渡すことのできるまでやってきた。その場所は造成後かなりの年月が過ぎていると推定された。10月を過ぎていたこともあつて草量は非常に少なく、草高は5cm以下であった。しかし、牧草 (多分、主にケ



写真13 蹄耕法造成放牧地を歩く参加者達 (斉藤牧場)



写真14 蹄耕法造成放牧地から旭川市街を望む (斉藤牧場)

ンタッキーブルーグラス)の密度は非常に高く、良い草地であると感じた。春先の最も草の多い時期では草高はどのぐらいになるのか質問してみた。答えはどんなに高くても長靴の先が隠れる程度(10~15cm)であるとのことであった。その位の草量で全頭放牧して、果たして草が足りるのだろうかとの疑問も残ったが、時間が無かったのでそれ以上聞くことができなかつた。今度はもう一度、春の草が豊富な時期に訪問し、草地の状態とともに補助飼料の量など、全体の飼料構成等についてもみてみたいと思った。

斉藤牧場は多田牧場と同様、放牧主体の飼養であり、「ゆとり」の感じられる経営であったが、立地条件もさることながら、考え方もかなり異なると感じた。これも「ゆとり」の考え方の違いなのでしょう。そういえば、牛には一度もお目にかかれませんでした。今回は是非。

最後に斉藤氏の見送りを受け、バスは旭川駅へ。そこでJR移動組を降ろしたあと、午後5時30分過ぎ、終着の扇松園に到着。全日程無事終了となりました。

#### おわりに

本現地検討会に参加するまでは、上川地区の農業といえば、まず頭に浮かぶのは「稲作」であり、畜産では「大雪アンガス」がでてくるぐらいで、「酪農」のイメージは正直いってあまりなかつた。平地は稲作、畑作であり、畜産はそれ以外の山地で展開しなければならない現状を知った。また、山地で展開する酪農についてもいろいろな戦略があることも知ることができた。さらに、自分自身の中では未だ整理できていないが、「ゆとり」ある経営の「ゆとり」とは何なのか再考する良いチャンスになったと思う。